

第3回狛江市基本計画策定第二分科会会議録

- 1 日 時 令和元年6月25日(火)午後7時～8時49分
- 2 場 所 狛江市防災センター4階 401会議室
- 3 出席者 委員長 杉浦 浩 副委員長 五十嵐 太一
副委員長 富永 和身 委 員 五十嵐 秀司
委 員 成井 篤 委 員 後藤 千尋
委 員 清水 満 委 員 橋本 研
委 員 平山 達郎
事務局 池田企画調整担当主任 佐々木企画調整担当主任
- 4 欠席者 副委員長 馬場 健司
- 5 議 題 1. 施策の現状と課題について(3 活気にあふれ、にぎわいのあるまち)
2. その他
- 6 会議概要

議題1 施策の現状と課題について(7 自然を大切にし、快適に暮らせるまち)

委員長 それでは、ただいまから第2回狛江市基本計画策定分科会第二分科会を開催する。前回は、7「自然を大切にし、快適に暮らせるまち」をテーマに御議論をいただいたが、今回は3「活気にあふれ、にぎわいのあるまち」について御議論いただく。前回同様、自由闊達に御意見をいただきたいと考えている。それでは議論の前に、事務局に資料の説明をお願いします。

—事務局から資料説明—

委員長 それでは、議論をはじめます。

五十嵐秀委員 狛江ブランド農産物の生産については、なるべく多くの農家に参加してもらいたいところだと思うが、参加されない農家には何か特別な事情があるのか。

富永委員 私はGAP研究会に参加しているのだが、一番の問題点は、ブランド農産物に認定されたところで、10円・20円高く売れるわけではないという点である。どこの農家もある程度プライドを持って農業に取り組んでいるので、そんな認定は必要ないと考えている人が多いのではないかと。値段に差がつかないのであれば、積極的なメリットは少ない気がする。また、狛江市内の農家

の生産はどうしても少量多品目となっており、多品目の農産物をつくっていると、それぞれ認定を受けるのが負担になっているのだと思う。

五十嵐秀委員 農家にとってメリットが明確になっており、買い手側にもどのような農薬を使っているかといった情報が伝われば良いが。

富永委員 JAやスーパーに出荷している野菜については、生産履歴として農薬の種類や使用頻度について情報を提供しているが、GAPの認定を受けるには、農薬の保管に当たっては鍵のかかる場所にしまう、トラクター等を使用後に洗浄しなければいけないといった、もう少し高いハードルがある。

五十嵐秀委員 それぐらい厳しい基準があるのであれば、特に小さい子どもがいる家庭への訴求力は高いと思うので、もっとうまくアピールできれば良いと思う。

委員長 認定農業者が年々増加しているにも関わらず、日頃から狛江産の野菜を食べている市民の割合は下がっている。

また、消費生活相談の件数について、目標の方向が下になっているが、これで正しいのか。

事務局 相談件数が下落していれば、トラブルが減っているという解釈である。

委員長 相談件数がある程度あった方が、市民の関心が高いという捉え方もできると思う。野菜の話に戻るが、認定農業者がこれだけ目標を超過しているにも関わらず、狛江産野菜を食べる市民の割合が減っているということは、指標の設定に問題があったように思う。また、PR不足ということもあるかもしれない。

平山委員 第4次基本構想でも同じように活気があふれるまちを目指すとなっているが、平成30年度や平成29年度の決算を見ると、一般会計に占める農業費と商工費の割合が非常に小さい。

5つの重点プロジェクトの1つになっているが、この予算で推進するのは無理があるという印象を持った。

委員長 基本構想、基本計画、実行プランという、いわゆる上流から下流への流れの中で、最後のアウトプットの予算のところ、どうも腰砕けになっているのではないかという意見だと思うが、予算は市だけではなく、議会の承認を得る必要もあり、非常に難しい問題ではある。ただし、今回の基本計画の中で、農業や商業にこれまで以上に力を入れて取り組むという決意が盛り込まれた場合、予算への反映の後押しになるかもしれない。

事務局 予算だけを見ると、市として力を入れていないのではないかという意見が当然あると考える。ただし、予算の中には、大きな割合を占める人件費も含まれており、狛江市では農業委員会に所属する職員が一人しかいないため、予算としてはどうしても小さく見えてしまう。

五十嵐秀委員 「① 商工業の活性化」で、研究開発資金に対する融資あっせん制度につ

いて触れられているが、これは、融資の利子を行政が補填してくれる制度となっており、実質無利子で融資を受けられるという非常に魅力的な制度であるにも関わらず、実績が伸びていない。これは以前外部評価の対象事業にもなっていたが、非常にメリットがあるにも関わらず、認知されていないことに原因があると、外部表委員会からも指摘を受けた。私も市のホームページで探してみたが、そのページまで行き着かなかった。

五十嵐太委員 確かにこういう補助金の制度は、商業関係以外にも数多くあるが、市民や法人にはあまり知られていない。

平山委員 この制度の実績が伸びていないのは、銀行の審査の時点で落とされているということは考えられないか。

事務局 本来、この7年間で1件しかないということで、外部評価委員会の対象事業となった際に、件数が伸びていない理由を確認したところ、一つは、この融資制度の募集期間が限定されていたことから、もしかすると事業者がタイミングとして使いづらい制度になっているのではないかという議論になったことから、現在は随時募集という形にしている。

もう一つは、PR不足という指摘があったので、チラシを作成して、市内銀行の窓口等に設置することとした。そういった対応を行ったにも関わらず、実績が伸びていないというのが実情である。

五十嵐秀委員 本当に多くの施策や補助金があって、その中で自分にマッチしたものがあるということに、一般市民はなかなか気づくことができない。非常にもったいないと思う。

委員長 7年やって1件しか実績が出ないところを、制度を変えずに事務の簡素化だけを考えても、好転する可能性は低い。銀行とのタイアップや事業者への説明会の実施等がないと、育成とは言えないように思う。そのため、基本計画に記載するのであれば、事務の簡素化を目指すといった文言ではなく、制度の有効性についてPRをしていくといった文言にするべきだと考える。行政の計画で本当に効果が上がるかという議論はあるが、やはりその自治体の弱点だと思われるような分野・部門については、行政が積極的に踏み込んでいくべきである。

後藤委員 本制度は、市外の企業に向けて発信した方が、誘致のきっかけとして効果が上がりそうな気がする。

委員長 商工業の活性化というのはそこまでやるべきかという議論もあろうかと思う。累計1件の融資制度を7年も廃止もせずにやっているというのは、いかななものか。

橋本委員 「② 狛江のブランドの確立」について、ブランドという言葉をどういう意図で使っているのかが気になる。狛江産野菜や狛江産農産物で良かったの

ではないかと思う。ブランドというのは、どこでも買える、人々が憧れを抱くといったものではないか。

平山委員 山形のただちや豆は、ブランド化しているイメージがある。

橋本委員 購入できる場所も直売所や市内の一部のスーパーに限られていることから、買いたいと思った人もなかなか買えないのが現状である。そもそも、ブランド農産物というからには、もっとPRをする必要がある。もう少し親しみやすいネーミングつけるというのも方法かもしれない。

また、「③ まちの魅力の発信」について、狛江市の魅力はこれまでイベントを中心に一過性のものとなってしまっている傾向があることから、継続的に実施していくものが必要ではないかと思った。例えば、多摩川のボート屋が現在休業中であるとの記載があるが、そうではなく、継続的に実施することで、市内外の認知度を上げる取組が必要だと思った。

委員 長 確かに、ブランドという言葉は全体ではなく、3つぐらいに焦点を絞った方が良いかもしれない。狛江産野菜がどれもおいしいことは確かであろう。しかしながら、本当にブランドとして売るのであれば、もう少し絞った方が良いと思う。

また、イベントに依存していること、継続的な仕掛けが必要ということは、橋本委員のおっしゃるとおりだと思う。しかしながら、イベントを継続的なものにしていくということも必要な気がする。

1点確認だが、「③ まちの魅力の発信」に記載されているシャトルバスについて内容を教えていただきたい。

五十嵐太委員 ラグビーワールドカップ 2019 及び東京 2020 大会開催時に、狛江駅と東京スタジアムを往復するシャトルバスのことである。

平山委員 五十嵐太一委員に伺いたいのだが、商工会では異業種交流のようなものは開催しているのか。

五十嵐太委員 以前は実施していた。

平山委員 単体の企業や業種では難しいので、異業種交流会のようなものを活発にやらないと、新しい価値というのは創造できないように感じる。

後藤委員 「② 狛江ブランドの確立」について、ブランドの確立というのはブランディングのことを指しているのだと思うが、私のイメージでは、行政のブランディングはビジュアル面が軽視されている傾向にあり、あまり格好のいいものがない。市民は美しいもの、格好のいいものに敏感であり、そこまでお金をかけずにすぐに変えられる表面上のもので、それなりの効果が上がるため、ビジュアル面からのブランディングというものにも力を入れた方が良いでしょうと思う。狛江にもGAP研究会等にロゴマークがあるようだが、そのロゴマーク一つで、売り上げやブランドの確立に大きな影響を与える可能性があ

る。

また、看板の統制や駅前の景観規制を市が先導して行うことで、まちのブランド化につながるのではないかと思う。

五十嵐秀委員 確かにイベントというものは、一時的な盛り上がりを見せるが、その分落ち込みも大きい。そういった面も考慮して、安定性のあるものを打ち出していく必要があると思う。花火大会もすばらしいイベントだと思うが、何年に一回では、魅力の向上につながらないのではないか。狛江らしさということになると、やはり多摩川がキーワードになってくると思う。既に実施している狛江古代カップ多摩川イカダレース等を軸に、周辺自治体と連携してやっていくと、広がりが出てくるのではないかと思う。

富永委員 多摩川のボートが再開する見込みはあるのか。

五十嵐太委員 今後の方向性について、観光協会で話し合われていると聞いている。

五十嵐秀委員 昔ながらのボートは風流があって良かったと思う。

委員長 資料で、多摩川利活用基本計画について記載されているが、本計画は順調に進捗しているのか。河川敷でのバーベキューが禁止となり、利活用の幅が狭まったように思えるが。

富永委員 禁止としたのは、ごみとトイレの問題があったからである。

五十嵐太委員 あとは、煙とにおいの問題があった。

五十嵐秀委員 一方、川崎側では実施している。良識ある方々がバーベキューを行う分には問題ないと思う。再開できれば、和泉多摩川の商店街の消費も拡大する。そういった多摩川の魅力を知ってもらったり、人が集まったりするような仕組みを構築できれば良いと思う

後藤委員 バーベキュー以外で何か人が集まる仕組みが構築できれば良いが。バーベキューだと、どうしてもやんちゃな感じの若者が来るイメージがあって、老若男女が楽しめる環境ではなくなる気がする。

五十嵐秀委員 いきなり再開すると影響が大きいと思うので、まずは期間限定でやってみても良いかもしれない。

富永委員 折角河川敷があるので、これから先もずっと禁止ではもったいない気がする。例えば、金曜日及び土曜日の午後6時から10時までの限定運用等にするといった試みができれば良いが。

事務局 多摩川の利活用について、現在はドッグランを設置している。

委員長 ドッグランも良いと思うが、集客能力がそんなにないのが課題だと思う。

成井委員 ドッグラン及び駐車場については、試行実施であったと思うが、結果はどうなったのか。

事務局 ドッグラン及び駐車場は平成30年度までの試行実施であり、駐車場については現在利用できなくなっている。ドッグランについては、試行実施を継

続しても予算がかからないことから、運用を継続している。両方とも、最終決定はなされていない状況である。河川敷は国土交通省の管轄であるため、本格実施となると、国土交通省との手続きが必要となってくる。

委員 長 河川の管理は法律的にかなり厳しいところがある。例外的に認められているのが運動施設であり、その他では花火大会といった一過性のものが主である。確かに、バーベキューは度が過ぎて禁止されたが、改めて議論をする必要はあると思う。

後藤委員 国土交通省がよしとするかは別として、河川敷でバーベキューができるようになれば、インパクトがあると思う。

橋本委員 やはり、多摩川は狛江の一番の魅力だと思うので、それをいかさない手はないのではないかと。また、やるからには自治体であっても利益が上がるようにした方がよい。価値があるものを提供できれば、お金を払ってくれる人はたくさんいると思うので。

平山委員 話題は戻るが、GAP研究会のポスターを作っていると思うが、見たことがない。やはり、もう少しPRをしていかないといけない。商品自体に魅力があるのに、もったいない。

富永委員 需要が上がっても、逆に生産力が追いつかない可能性がある。

五十嵐太委員 確かに、スーパーや直売所で販売している狛江産野菜は、すぐに売り切れてしまうのが現状である。

富永委員 現在、スーパーに卸せるほどの生産力がある農家は、市内に 10 件ぐらいだと思う。スーパーの方からうちにも卸してくれないかという話はあるが、生産が追い付いていない。

後藤委員 農業従事者が足りていないのか。

富永委員 それもあるが、農地面積に限りがあるため、現在よりも生産量を増やすというのは難しい。

委員 長 生産緑地制度の活用の幅を広げていかないと、都市農地は衰退の一途を辿ることになる。

五十嵐秀委員 生産緑地も市民農園にできるようになったので、もし農家の方が望むようであれば、市民農園が増設されれば良いと思う。市民からの需要は高いと思うので。

富永委員 これからの農家は、ブランド化して、少しでも高く自分の野菜を売りたいという農家と、生産よりも農地の保全に重きをおいて、市民農園を積極的に提供していくような農家の二極化になっていくのではないかと。それを考えると、今後も農産物の生産が伸びるとは思わない。

橋本委員 狛江市には 2 件地ビールをつくっているところがあると思うので、そういったものも打ち出していけば良いと思う。

五十嵐秀委員 ふるさと納税について、狛江市は立場としては減収側だと思うが、もう少し返礼品を工夫した方が良いのではないかと。今話が出た地ビールも含め。

成井委員 多摩川の利活用や駅前の再開発というのは時間がかかる案件であり、すぐに成果は出ないと思う。そういった意味で、すぐに効果が出るような案件を見出す必要があると思うが、総花的に取り組むのではなく、まずは一本軸を据えて取り組んだ方が良いと思う。

清水委員 ブランディングの話が先ほどあったが、まずは発信力を高めるのが先決だと思う。発信力がないと、いくら魅力的な事業を展開していても、知らなかったで終わってしまう。そういった意味で、アンテナショップを立ち上げるというのは、非常に有効な手立ての1つだと思う。都道府県では、当たり前のように銀座や新宿にアンテナショップを構えている。初めは期間限定でも良いので、取り組んでみても良いと思う。

委員 長 方法論はこれから議論するとして、そういった意欲を基本計画に示すということは必要ではないかと思う。

五十嵐秀委員 まずは、戦略やストーリー練って、情報を発信していく必要があるように感じる。

橋本委員 その一方で、やはり魅力が少ない状態でPRしても意味がないと思うので、まずは5年間の計画の中で魅力を磨き上げる必要があると思う。

委員 長 ブランディングや発信の手法については、何を軸に据えるかという議論もあわせてやらないといけないのではないかと。

五十嵐秀委員 ブランディングにしても情報の発信にしても、やはり中身がないと意味がない。

委員 長 現時点ではなくても、イメージぐらいは持っておかないと議論は進まないかもしれない。

五十嵐秀委員 狛江でクラウドファンディングを実施していると伺ったが、具体的にどのような取組を行っているのか。

事務局 平成31年度の花火大会への寄付金に係るクラウドファンディングを実施した。その後、狛江市がクラウドファンディングの業者と提携を結んで、市民によるクラウドファンディングの支援を行っている。

五十嵐秀委員 市民側にそういった需要があるのであれば、それを率先して支援していくのが本来の行政の誘導の役割なのだと思う。行政は本当に多岐にわたる施策を展開しており、どの施策にしても基本的には予算がかかるわけで、そういった厳しい状況下で、クラウドファンディングという手法を取り入れていくというのは大事な考えである。

成井委員 狛江市にFM局をつくるという動きがあったと思うが、現時点での進捗具合を確認したい。

事務局 市としては、FM局が災害時等の新たな情報発信源になることから、開局に係る補助制度を創設して、団体に補助をするような形で支援をしていくことを想定している。

成井委員 FMラジオは、年配の方で聞いている方も多いのではないか。

平山委員 私は調布FMの設立に携わったのだが、災害情報は何年に1回、下手すると何十年に1回しかない。そのためにFM局を維持するのは非常に苦勞すると思う。予算やお金をかけないようにしたいのならば、調布FMを活用するというのも手ではないか。

委員長 事務局においては、今回及び前回の議論をまとめて、次回委員会の資料を作成いただきたい。

議題2 その他

委員長 その他特に意見等なければ、第3回狛江市基本計画策定第二分科会を終了する。